

弓町より

石川啄木

食うべき詩

詩というものについて、私はずいぶん長い
間迷うてきた。

ただに詩についてばかりではない。私の今
日まで歩いてきた路は、ちょうど手に持って
いる蠟燭（ろうそく）の蠟のみるみる減って

いくように、生活というものの威力のために
自分の「青春」の日に減らされてきた路
筋である。その時その時の自分を弁護するた
めにいろいろの理窟を考えだしてみても、そ
れが、いつでも翌る日の自分を満足させなか
った。蠟は減りつくした。火が消えた。幾十
日の間、黒闇（くらやみ）の中に体を投げだ
していたような状態が過ぎた。やがてその暗
の中に、自分の眼の暗さに慣れてくるのをじ
っと待っているような状態も過ぎた。

そうして今、まったく異なった心持から、自分の経てきた道筋を考えると、そこにいろいろいいたいことがあるように思われる。

くくくくくくくくくくくくくくくく

以前、私も詩を作っていたことがある。十七八のころから二三年の間である。そのころ私には、詩のほかは何ものもなかった。朝から晩まで何とも知れぬものにあこがれている心持は、ただ詩を作るということによっているくぶん発表の路を得ていた。そうしてその心

持のほかには何ももっていなかった。――そのころの詩というものは、誰も知るように空想と幼稚な音楽と、それから微弱な宗教的要素へないしはそれに類した要素へのほかには、因襲的な感情のあるばかりであった。自分でそのころの詩作上の態度を振返ってみて一ついいたいことがある。それは、実感を詩に歌うまでには、ずいぶん煩瑣（はんさ）な手続を要したということである。たとえば、ちよつとした空地に高さ一丈ぐらいの木が立

っ
て
い
て、
そ
れ
に
日
が
あ
た
っ
て
い
る
の
を
見
て
あ
る
感
じ
を
得
た
と
す
れ
ば、
空
地
を
広
野
に
し、
木
を
大
木
に
し、
日
を
朝
日
か
夕
日
に
し、
の
み
な
ら
ず、
そ
れ
を
見
た
自
分
自
身
を、
詩
人
に
し、
旅
人
に
し、
若
き
愁
（う
れ）
い
あ
る
人
に
し
た
上
で
な
け
れ
ば、
そ
の
感
じ
が
当
時
の
詩
の
調
子
に
合
わ
ず、
ま
た
自
分
で
も
満
足
す
る
こ
と
が
で
き
な
か
っ
た。

くくくくくくくくくくくくくくくくく

二三年経った。私がその手続にだんだん慣

れ
て
き
た
時
は、
同
時
に
私
が
そ
ん
な
手
続
を
煩
（
わ
ず
ら）
わ
し
く
思
う
よ
う
に
な
っ
た
時
で
あ
っ
た。
そ
う
し
て
そ
の
こ
ろ
の
い
わ
ゆ
る「
興
（き
よう）
の
湧
い
た
時」
に
は
書
け
な
く
っ
て、
か
え
っ
て
自
分
で
自
分
を
軽
蔑
（け
い
べ
つ）
す
る
よ
う
な
心
持
の
時
か、
雑
誌
の
締
切
と
い
う
実
際
上
の
事
情
に
迫
ら
れ
た
時
で
な
け
れ
ば、
詩
が
作
れ
ぬ
と
い
う
よ
う
な
奇
妙
な
こ
と
に
な
っ
て
し
ま
っ
た。
月
末
に
な
る
と
よ
く
詩
が
で
き
た。
そ
れ
は、
月
末
に
な
る
と
自
分
を
軽
蔑
せ
ね
ば
な
ら
ぬ
よ
う
な
事
情
が
私
に
あ
っ

たからである。

そうして「詩人」とか「天才」とか、そのころの青年をわけもなく酔わしめた揮発性（きはつせい）の言葉が、いつの間にか私を酔わしめなくなった。恋の醒めぎわのような空虚の感が、自分で自分を考える時はもちろん詩作上の先輩に逢い、もしくはその人たちの作を読む時にも、始終私を離れなかった。それがその時の私の悲しみであつた。そうしてその時は、私が詩作上に慣用した空想化の手続が、私のあらゆることに対する態度を侵していた時であつた。空想化することなしには何事も考えられぬようになっていた。

象徴詩という言葉が、そのころ初めて日本の詩壇に伝えられた。私も「吾々の詩はこのままではいけぬ」とは漠然とながら思っていたが、しかしその新らしい輸入物に対しては「一時の借物」という感じがついて廻つた。

そんならどうすればいいか？ その問題をまじめに考えるには、いろいろの意味から私

の素養が足らなかった。のみならず、詩作その事に対する漠然たる空虚の感が、私が心をその一処に集注することを妨げた。もつともそのころ私の考えていた「詩」と、現在考えている「詩」とは非常に違ったものであるのはむろんである。

二十歳の時、私の境遇には非常な変動が起った。郷里（くに）に帰るということと結婚という事件とともに、何の財産なき一家の糊口（ここう）の責任というものが一時に私の上に落ちてきた。そうして私は、その変動に對して何の方針もきめることができなかった。およそその後今日までに私の享（う）けた苦痛というものは、すべての空想家――責任に對する極度の卑怯者（ひきょうもの）の、当然一度は受けねばならぬ性質のものであった。そうしてことに私のように、詩を作るということとそれに関連した憐（あわ）れなプライドのほかには、何の技能ももっていない者においていっそう強く享（う）けねばならぬも

のであった。

くくくくくくくくくくくくくくくく

詩を書いていた時分に対する回想は、未練から哀傷（あいしように）となり、哀傷から自嘲（じちょう）となった。人の詩を読む興味もまったく失われた。眼を瞑（ねぶ）ったよ
うなつもりで生活というものの中へ深入りしていく気持は、時としてちょうど痒（かゆ）い腫物（はれもの）を自分でメスを執（と）って切開するような快感を伴うこともあった。

また時として登りかけた坂から、腰に縄（なわ）をつけられて後ざまに引き下（おろ）されるようにも思われた。そうして、一つ処にいてだんだんそこから動かなくなるような気がしてくると、私はほとんど何の理由なしに自分で自分の境遇そのものに非常な力を出して反抗を企てた。その反抗はつねに私に不利な結果を齎（もたら）した。郷里（くに）から函館（はこだて）へ、函館から札幌（さっぽろ）へ、札幌から小樽（おたる）へ、小

樽から釧路（くしろ）へ――私はそういう風に食を需（もと）めて流れ歩いた。いつしか詩と私とは他人同志のようになっていた。たまたま以前私の書いた詩を読んだという人に逢って昔の話をされると、かつていっしょに放蕩（ほうとう）をした友だちに昔の女の話をすると同じ種類の不快な感じが起った。生活の味いは、それだけ私を変化させた。「――新体詩人です」といって、私を釧路の新聞に伴れていった温厚（おんこう）な老政治家が、ある人に私を紹介した。私はその時ほど烈しく、人の好意から侮蔑を感じたことはなかった。

思想と文学との両分野に跨（またが）って起った著明な新らしい運動の声は、食を求めて北へ北へと走っていく私の耳にも響かずにはいなかった。空想文学に対する倦厭（けんえん）（けん）の情と、実生活から獲（え）た多少の経験とは、やがて私にもその新らしい運動の精神を享入（うけい）れることを得しめた。

遠くから眺めていると、自分の脱けだしてきた家に火事が起って、みるみる燃え上がるのを、暗い山の上から瞰下（みおろ）すような心持があつた。今思つてもその心持が忘られない。

詩が内容の上にも形式の上にも長い間の因襲を蟬脱（せんだつ）して自由を求め、用語を現代日常の言葉から選ばうとした新らしい努力に対しても、むろん私は反対すべき何の理由ももたなかった。「むろんそうあるべき

である」そう私は心に思った。しかしそれを口に出しては誰にもいいたくなかった。いうにしても、「しかし詩には本来ある制約がある。詩が真の自由を得た時は、それがまったく散文になつてしまつた時でなければならぬ」というようなことをいった。私は自分の閱歴（えつれき）の上から、どうしても詩の将来を有望なものとは考えたくなかった。たまたまそれらの新運動にたずさわっている人々の作を、時おり手にする雑誌の上で読んで、

その詩の拙（つたな）いことを心ひそかに喜んでいた。

散文の自由の国土！ 何を書こうというきまったことはなくとも、漠然とそういう考えをもつて、私は始終東京の空を恋しがっていた。

○

釧路は寒い処であつた。しかり、ただ寒い処であつた。時は一月末、雪と氷に埋もれて川さえおおかた姿を隠した北海道を西から東

に横断して、着てみると、華氏（かし）零下二十一三十度という空気も凍（いて）たような朝が毎日続いた。氷った天、氷った土。一夜の暴風雪に家々の軒のまったく塞（ふさ）がった様（さま）も見た。広く寒い港内にはどこからともなく流氷が集ってきて、何日も何日も、船も動かず波も立たぬ日があつた。私は生れて初めて酒を飲んだ。

ついに、あの生活の根調のあからさまに露出した北方植民地の人情は、はなはだしく私

の弱い心を傷づけた。

四百トン足らずの檻樓（ぼろ）船に乗って私は釧路の港を出た。そうして東京に帰ってきた。

帰ってきた私は以前の私でなかったごとく、東京もまた以前の東京ではなかった。帰ってきて私はまず、新らしい運動に同情を持っていない人の意外に多いのを見て驚いた。というよりは、一種の哀傷の念に打たれた。私は退いて考えてみた。しかし私が雪の中から抱いてきた考えは、漠然とした幼稚なものではあったが、間違っているとは思えなかった。そうしてその人たちの態度には、ちょうど私自身が口語詩の試みに対して持った心持に類似点があるのを発見した時、卒然として私は自分自身の卑怯（ひきょう）に烈しい反感を感じた。この反感の反感から、私は、まだ未成品であったためにいろいろの批議を免（まぬ）が（）れなかった口語詩に対して、人以上に同情をもつようになった。

しかしそのために、熱心にそれら新しい詩人の作を読むようになったのではなかった。それらの人々に同情するということは、畢竟（ひっきょう）私自身の自己革命の一部分であつたにすぎない。もちろん自分がそういう詩を作ろうという気持になつたこともなかった。―僕も口語詩を作る―といったようなことは幾度もいった。しかしそういう時は、―もし詩を作るなら―という前提を心に置いた時か、でなくば口語詩に対して極端な反感を抱いている人に逢つた時かであつた。

くくくくくくくくくくくくくくくく

その間に、私は四五百首の短歌を作つた。

短歌！あの短歌を作るといふことは、い

までもなく叙上の心持と齟齬（そご）してい

る。

しかしそれにはまたそれ相応の理由があつた。私は小説を書きたかつた。否、書くつもりであつた。また実際書いてもみた。そうしてついに書けなかつた。その時、ちょうど夫

婦喧嘩（げんか）をして妻に敗けた夫が、理
 由もなく子供を叱（しか）ったり虐（いじ）
 めたりするような一種の快感を、私は勝手気
 儘（かってきまま）に短歌という一つの詩形
 を虐使うことに発見した。
 〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰
 やがて、一年間の苦しい努力のまったく空
 （むな）しかったことを認めねばならぬ日が
 来た。

自分で自分を自殺しうる男とはどうしても
 信じかねながら、もし万一死ぬことができた
 なら……というようなことを考えて、あの森
 川町の下宿屋の一室で、友人の剃刀（かみそ
 り）を持ってきて夜半ひそかに幾度となく胸
 にあててみた……：ような日が二月も三月も続
 いた。

そうしてるうちに、一時脱れていた重い責
 任が、否応（いやおう）なしにふたたび私の
 肩に懸（かか）ってきた。
 〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰
 いろいろの事件が相ついで起った。

のなかった詩を、必要な物の一つにするゆえ
 ンである。詩の存在の理由を肯定するただ一
 つの途（みち）である。

以上のいい方はあまり大雑駁（おおざっぱ）
 ではあるが、二三年來の詩壇の新らしい運動
 の精神は、かならずここにあったと思う。否
 あらねばならぬと思う。かく私のいうのは、
 それらの新運動にたずさわった人たちが二三
 年前に感じたことを、私は今始めて切実に感
 じたのだということ承認するものである。

くくくくくくくくくくくくくくくく

新らしい詩の試みが今までに受けた批評に
 ついて、二つ三つ試みてみたい。

「なりとであるもしくはだの相違にすぎない
 という人があった。それは日本の国語がまだ
 語格までも変るほどには変遷（へんせん）し
 ていないということを指摘したにすぎなかつ
 た。」

人の素養と趣味とは人によって違う。ある
 内容を表出せんとするにあたって、文語によ

ると口語によるとは詩人の自由である。詩人はただ自己の最も便利とする言葉によって歌うべきである。という議論があつた。いちおうもつともな議論である。しかし我々が「淋しい」と感ずる時に、「ああ淋しい」と感ずるのであるうか、はたまた「あな淋し」と感ずるであらうか。「ああ淋しい」と感じたことを「あな淋し」といわねば満足されぬ心には徹底と統一が欠けている。大きくいえば、判断Ⅱ実行Ⅱ責任というその責任を回避する

心から判断をごまかしておく状態である。趣味という語は、全人格の感情的傾向という意味でなければならぬのだが、おうおうにしてその判断をごまかした状態の事のように用いられている。そういう趣味ならば、すくなくとも私にとっては極力排斥（はいせき）すべき趣味である。一事は万事である。「ああ淋しい」を「あな淋し」といわねば満足されぬ心には、無用の手続があり、回避があり、ごまかしがある。それらは一種の卑怯（ひきよ

う）でなければならぬ。「趣味の相違だからしかたがない」とは人のよくいうところであるが、それは「いったとお前に解りそうにないからもういわぬ」という意味でないかぎり、卑劣極まっていたいい方といわねばならぬ。我々は今まで議論以外もしくは以上の事として取扱われていた「趣味」というものに対して、もっと厳肅（げんしゆく）な態度をもたねばならぬ。

すこし別なことではあるが、先ごろ青山学院で監督が何かしていたある外国婦人が死んだ。その婦人は三十何年間日本にいて、平安朝文学に関する造詣（ぞうけい）深く、平生日本人に対しては自由に雅語（がご）を駆使（くし）して応対したということである。しかし、その事はけっしてその婦人がよく日本を了解（りようかい）していたという証拠にはならぬではなからうか。

詩は古典的でなければならぬとは思わぬけ

れども、現在の日常語は詩語としてはあまりに蕪雑（ぶざつ）である、混乱している、洗練されていない。という議論があった。これは比較的有力な議論であった。しかしこの議論には、詩そのものを高価なる装飾品のごとく、詩人を普通人以上、もしくは以外のごとく考え、または取扱おうとする根本の誤謬（ごびゅう）が潜（ひそ）んでいる。同時に、「現代の日本人の感情は、詩とするにはあまりに蕪雑である、混乱している、洗練されていない」という自滅（じめつ）的の論理を含んでいる。

新らしい詩に対する比較的まじめな批評は主としてその用語と形式とについてであった。しからずんば不謹慎（ふきんしん）な冷笑であつた。ただそれら現代語の詩に不満足な人たちに通じて、有力な反対の理由としたものが一つある。それは口語詩の内容が貧弱であるということであつた。

しかしその事はもはやかれこれいうべき時

期を過ぎた。

くくくくくくくくくくくくくくくく

とにもかくにも、明治四十年代以後の詩は明治四十年代以後の言葉で書かれねばならぬということとは、詩語としての適不適、表白の便不便の問題ではなくて、新らしい詩の精神すなわち時代の精神の必要であつた。私は最近数年間の自然主義の運動を、明治の日本人が四十年間の生活から編みだした最初の哲学の萌芽であると思う。そうしてそれがすべて

の方面に実行を伴っていたことを多とする。哲学の実行という以外に我々の生存には意義がない。詩がその時代の言語を採用したということも、その尊い実行の一部であつたと私は見る。

くくくくくくくくくくくくくくくく

むろん、用語の問題は詩の革命の全体ではない。

そんなら（一）将来の詩はどういうものでなければならぬか。（二）現在の諸詩人の作

に私は満足するか。(三)そもそも詩人とは何ぞ。

便宜上私は、まず第三の問題についていおうと思う。最も手取早(てっとりばやく)いえば私は詩人という特殊なる人間の存在を否定する。詩を書く人を他の人が詩人と呼ぶのは差支(さしつかえ)ないが、その当人が自分分は詩人であると思つてはいけない、いけないといつては妥当(だとう)を欠くかもしれないが、そう思うことによつてその人の書く

詩は墮落(だらく)する……我々に不必要なものになる。詩人たる資格は三つある。詩人はまず第一に「人」でなければならぬ。第二に「人」でなければならぬ。第三に「人」でなければならぬ。そうしてじつに普通人のもつてゐるすべての物をもつてゐるところの人でなければならぬ。

いい方がだいぶ混乱したが、一括(かつ)すれば、今までの詩人のように直接詩と関係のない事物に対しては、興味も熱心も希望も

もっていない――餓（う）えたる犬の食を求
むるごとくにただただ詩を求め探している詩
人は極力排斥（はいせき）すべきである。意
志薄弱なる空想家、自己および自己の生活を
厳粛（げんしゆく）なる理性の判断から回避
している卑怯者、劣敗者の心を筆にし口にし
てわずかに慰めている臆病者、暇ある時に玩
具（おもちゃ）を弄（もてあそ）ぶような心
をもつて詩を書きかつ読むいわゆる愛詩家、
および自己の神経組織の不健全なことを心に
誇る偽患者（にせかんじゃ）、ないしはそれ
らの模倣者（もほうしゃ）等、すべて詩のた
めに詩を書く種類の詩人は極力排斥すべきで
ある。むろん詩を書くということは何人にあ
つても「天職」であるべき理由がない。「我
は詩人なり」という不必要な自覚が、いかに
従来の詩を墮落せしめたか。「我は文学者な
り」という不必要な自覚が、いかに現在にお
いて現在の文学を我々の必要から遠ざからし
めつつあるか。

すなわち真の詩人とは、自己を改善し自己の哲学を実行せんとするに政治家のごとき勇氣を有し、自己の生活を統一するに実業家のごとき熱心を有し、そうしてつねに科学者ののごとき明敏なる判断と野蛮人（やばんじん）のごとき卒直なる態度をもつて、自己の心に起りくる時々刻々の変化を、飾らず偽らず、きわめて平氣に正直に記載（きさい）し報告するところの人でなければならぬ。

記載報告ということとは文芸の職分の全部で

ないことは、植物の採集分類が植物学の全部でないと同じである。しかしここではそれ以上の事は論ずる必要がない。ともかく前いったような「人」が前いったような態度で書いたところの詩でなければ、私は言下（げんか）に「すくなくとも私には不必要だ」ということが出来る。そうして将来の詩人には、従来の詩に関する知識ないし詩論は何の用をもなさない。――たとえば詩（抒情詩）はすべての芸術中最も純粋なものであるという。ある

時期の詩人はそういう言をもつて自分の仕事を恥かしくないものにしようと努めたものだし、しかし詩はすべての芸術中最も純粋なものだ、ということとは、蒸溜水（じょうりゅうすい）は水の中で最も純粋なものだ、というと同じく、性質の説明にはなるかもしれぬが、価値必要の有無の標準にはならない。将来の詩人は、けっしてそういうことをいうべきでない。同時に詩および詩人に対する理由なき優待をおのずから峻拒（しゅんきょ）すべきである。い

っさいの文芸は、他のいっさいのものと同じく、我らにとってはある意味において自己および自己の生活の手段であり方法である。詩を尊貴なものとするのは一種の偶像崇拜（ぐ

うぞうすうはい）である。

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

詩はいわゆる詩であってはいけない。人間の感情生活（も）と適当な言葉もあろうと思

うが、の変化の厳密なる報告、正直なる日記

でなければならぬ。したがって断片的でなけ

識に乏（とぼ）しい私の羨（うら）やみかつ
敬服（けいふく）するところではあるが、諸
君はその研究から利益とともにある禍（わざ
わ）いを受けているようなことはないか。か
りにもし、ドイツ人は飲料水の代りに麦酒（
ビール）を飲むそうだから我々もそうしよう
というようなこと……とまではむろんいくま
いが、些少（せしょう）（さしょう）でもそれに類したこ
とがあつては諸君の不名誉ではあるまいか。
もつと卒直（そっしつ）にいえば、諸君は諸君の詩に關す

る知識の日に日に進むとともに、その知識の
上にある偶像を拵（こしら）え上げて、現在
の日本を了解することを閑却（かんきやく）
しつつあるようなことはないか。両足を地面
（じべた）に着けることを忘れてはいないか。
また諸君は、詩を詩として新らしいものに
しようということに熱心なるあまり、自己お
よび自己の生活を改善するという一大事を閑
却（かく）してはいないか。換言すれば、諸君のかつ
て排斥（はいせき）したところの詩人の墮落

